
ポケットモンスター レグルス

Ferix

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター レグルス

【NZコード】

N3460Z

【作者名】

Ferix

【あらすじ】

D・H団リーダーであるターナーの世界征服に立ち向かう、主人公のカズキとそのポケモンたちとの話である

少し執筆者の妄想も入っています。

episode 1 旅の予兆（前書き）

Ferixです！

基本はゲームをプレイしてゐるのを基準にしてます

初投稿なので下手ですがよろしくお願いします

episode 1 旅の予兆

「」はポケモンと人間が共存する世界
ポケモンと人が協力し合って生きている
ポケモンを使い「悪」をはたらく人間もいる
今までにもたくさんそんなことあった
俺も2回そんなことがあった

一つはホウエンで、もう一つはトーホクで

チャンピオンにもなったが、そんな器じゃないし、いろんな地方にも行きたい

「次はどういくかな」
「どこに行くの？」

その声が聞こえて目の前が何かで覆われる

「ミドリカ？」
「当たった〜」

「」はホウエンで住んでた家のお隣さんだ
同じ年でちょっととうるさい奴だ
「久しぶりだな、いつ以来？」
「うーんと、こおりの島だよね最後」
「そうだつたつけ？」
「うん、そんなことどうぞ」
「他の地方だよ」

「他の地方でもチャンピオン狙うの？」

「まだちゃんと決めてないけど、まあ最終的にはやつなるんじゃねーかな」

「どこの地方にするの？」

「ジョウトにでも久しぶりに帰るかな」

「えつ、カズキ君ってジョウト出身なのー!?」

「ああ、言つてなかつたつけ。父さんはもともとウシギ博士の助手をしてたんだ。それでその後母さんと俺のふたりでミシロに引っ越ししたんだ。そしたら父さんはトーホクの研究所を任されてまた引っ越ししたんだ」

「そうだつたんだね」

「ああ、まあそれ以外にもジョウトに行きたい理由はあるんだけどな」

「なになに？」

「まあにギンノさんがジョウトのシロガネ山に強いトレーナーがいるつていつたからわ」

ギンノさんはトーホクのチャンピオンであり、水の都アルトマーレジムのジムリーダーだ。昔、銀色の魔女と言われてたらしい。

「さすがチャンピオンだね、強いトレーナーがいるとすぐに食いつくねえ」

「別にいいだろ」

「悪いなんかいつてないよ、それより私も連れてつてよ」

「え、なんで？」

「別にいいでしょ」

「まあ、別にいいけど…」

「ありがとう!じゃあ荷物取りにいかないとね」

「そうだ、トーホクに家あんの?」

「借りれる場所ないからカズキくんのお母さんに頼んで荷物置かしてもらつてるんだ」

「今初めてしつたよ…」

「とつあえず荷物取りにいかないとね
「ああ、そうだな」

～ハクジタウン～

「ただいま、母さん」

「お帰りなさい、カズキ」

「おじやましまーす」

「あら、こりつしゃー!! つかやん。カズキが女の子連れてくるなんて」

「荷物取りにきただけだよ、母さん」

「あら、またどつかにいくの」

「うん、ジョウトにてつと黙つてるんだ」

「懐かしいわね、ジョウト。母さんも行こうかしぃりへ。」

「へーのー。」

「冗談よ、母さんは家守らないといけないしね」

「そつか、じやありゅうと荷物つめてくるよ」

階段を登る一人

このとおりまだ誰もなにが起るかは知る由も無かつた

episode 1 旅の予兆（後書き）

3回に一度かけるようになりますのでお願いします

e p i s o d e 2 蝶衣の玉髄 (漫畫)

なんか... ラ///π - エト...

episode 2 船内での出会い

「準備できたか？」

「できたよ」

「よし、じゃあ行くか」

階段を降り、母に挨拶をつげると一人は外にでた

「カズキ君、どうやって行くつもり？」

「アーシア島からジヨウトのタンバに向かって船ができるはずだからそれに乗つて行くよ」

「じゃあアーシア島に行こう！」

ポケットからボールを取り出し空に向かって投げると、なかからトロピウスとドラドーンがでてくる

「トロピウス！【そらをとぶ】だ！」

「ドラドーンも【そらをとぶ】よ！」

二人は空に上がった

ちなみにふたりの手持ちは

カズキ

トロピウス
ファマイン
フローリア
バフォット
リーフィス
ガブリアス

ミドリ

ドリードーン
エレキブル
ユニアス
タテボーシ
ブーバーン
プラネム

「ここのままアーシア島までいって

同時刻 レンジャーベース

「テテレテッテレー、モスギスさん登場！」

「やあモスギスどうしたんだい？」

「ジャッキーに報告があるので、ななな、なんと…ターナーが動きだしました！」

「それは本当かモスギス！？」

「はい、これはポウがつかんだ情報なのでしんじるべきでふ…」「狙いはどこかわかるか？」

「あはい、ターナーはジョウトを狙つてるようです」

「わかった、モスギスは先にジョウトにいっていってくれ、俺はナツユキと後から行く」

「了解！」

（戦いがまた始まるのか…）

2日前 ポケモン城

「もう一度このポケモンを使うとはな、いつかの復讐を、恐怖を見せてやる。お前の大切なものがなくなるのはお前のせいだと感じるがいい、ククク…」

冷たいその笑い声は静かに闇に消えていった

現在 アーシア島

「ちょっとチケット買つてくるから待つといってくれ」

「私もついてこようか？」

「別にいいよ、お前の分も買つてくるから」

「そう…ありがとう」

そういうとカズキはチケット売り場に向かって歩きだした（暇だなー、カズキ君ってポケモンのことばっかりだなー、ちょっと見てくれてもいいのに）

チケット売り場から戻つてくるカズキ

「ほら、これ船のチケット」

「ありがとう、いくらだつた？」

「あー、別にいらねーよ」

「えつ、いいの？」

「別にいいよ、ほら早く行くぞ」

「う、うん。ありがとう」

船に向かつて歩き出すふたり

船に乗り込み部屋を、探す

「にしてもでかい船だね」

「まあ豪華客船だしな」

「そんなお金どこにあつたの…？」

「なんか、トレーナーがたくさん勝負しかけてくるからこいつの間に

かな」

「へー、そうなんだ」

そして自分の部屋番号をひとつ上のドア

—あ、私こそだよ

俺は隣だ

偶然だね！」

「うん！」

部屋に入るふたり

「へー、結構大きにならじの部屋」

「ででこい、みんな」

キリスト教

「疲れをとどいてくれよ」

「うー、マジで？」

「いま行く」

アリハニヒト船屋からドヘマノリ

卷之二

(うつ、か、可愛い)

百二十八

「な、なんでもねー

腹すいてしょーかねーよ

ପାତା ୧୦

（な、なんか緊張してるし！頑張れ俺！）

い二みても応した

「アーティストの？」

「な、なんでもない！」

「ふうん」

いろいろ見て回っていると、じろから声が聞こえてくる

「あれ？ カズキ？」

ふりかえると見たことがある人がいた

「あなたは、ユウキさん！」

episode 2 船内での出来事（後書き）

コメント待つてまーす

episode3 バトル大会（前書き）

やつぱぐるるーです...

とりあえず二話目じゅるー

「あなたは、ユウキさん!」

「やつぱりカズキか! えつと... 」 いかの女の子は?」

「あつ、はじめまして、ミドリです」

（かつこじい人だなあ）

「よろしく、俺はユウキ! ん々? ミドリって確かにハルカのいと

こにもいたような...」

「そりなんですよ、ハルカお姉ちゃんこと」です。ユウキさんの話はよくハルカお姉ちゃんから聞いてます。ホウエンのチャンピオンになつたつてきました」

「あの時はおれもポケモン図鑑を集めてたしさ。それよりふたりもジョウトに向しにいくんだ?」

「俺の故郷なんでね」

「へえそりだつたんだな」

カズキはユウキになぜホウエン、トーホクに来たのかをはなす

「そりだつたんだな、やつぱりジョウトでもチャンピオン狙うのか?」

「もちろんですよー それよりユウキさんはジョウトに向しにいくんですか?」

「まあ、ちょっとな...」

首をかしげるカズキ

「そりだ! いまから」 飯食べるんですけど、ユウキさんはむづですか?」

「俺はさつき食べたからいいよ、それより8時からポケモンバトルの大会があるんだけどでないか?」

「でますでます！」

「私はやめときます、自信ないんで、」

「ならカズキ今からエントリーしに行くつもりだからお前の名前も
かいておくよ」

「お願いします」

ユウキは去つていく

「ねえ、カズキくんとユウキさんはどちらがつよいの？」

「一勝一敗だよ」

「互角なんだ、私なんか一回もカズキくんに買ったことないのに、
ユウキさんはすごいなー。出なくて正解だつたね！」

「まあ、だてに伝説の名をじょつてないよな」

「伝説の名？」

「えーと、一年前にホウエンで異常気象あつただろ？」

「カズキくんが解決したやつでしょ？」

「そうだ、それと同じような事件がその時から3年前、つまり今か
ら4年前にもあつたんだ。それを解決したのがユウキさんだつたん
だ」

「だから伝説なんだね」

「そーゆーことだ」

「今回のバトルでどっちが伝説の名にふさわしいか決まるかもね！」

「かもな」

食事を済ませたふたりは一旦部屋に戻りポケモンを連れてきた
そして、ミドリは観客席にカズキは大会出場者の控え室にむかつた
そこにはトーナメント表があつた

そこには32人の名前が書かれている

「俺たちは決勝で戦うみたいだな」

うしろからユウキが話しかけられる

「そうみたいですね、ユウキさん。負ける気はないですか？」

「それはこっちもだよ、カズキ。全力を出し切る！」

従業員出口からスタッフが出てくる

「それでは今から大会のルール説明をいたします。バトル形式はシングルバトル。ポケモンは3匹です。それでは今からポケモンのエントリーをいたしますので呼ばれましたらこちらまでお願いいたします」

（3対3か…どのポケモンでいくかな）

「ヒイラギ カズキさん、こちらまでどうぞ」

（あいつらにしよう）

エントリーパネルに打ち込む

「それでは、いまから一回戦をはじめます。ユウキさん、こがねさんお願ひします」

スタジアムに出て行くふたり

「ユウキさん、がんばって下さい」

ユウキは親指をたててみせる

そして、大会の幕があけた

episode3 バトル大会（後書き）

次はどうどうバトルです。

しばらく続きます

episode 4 | 回戦（前書き）

初のバトルです！

結構むずかつた 笑

episode 4 一回戦

「それでは、今から第一回戦を始めます。両者前へ、礼！」
頭を下げるふたり

「では、バトルスタート！」

「いけつ、ファイニクス！」

「いつてこい、ライチュウ！」

ユウキはファイニクス こがねはライチュウをだした
相性はすこしユウキが有利だ

「ファイニクス上空飛行だ！」

「ライチュウ「十万ボルト」だ！」

「かわせ！ ファイニクス！」

電気をかわすファイニクス

「ファイニクス、「火炎放射」！」

「ライチュウ！ 「高速移動」で相手の下に逃げる！」

ライチュウは素早くうごきファイニクスの下まで逃げる

「ライチュウ！ 「ボルテッカー」！」

「ファイニクスかわせ！」

しかし、ライチュウの攻撃をくらい地面に倒れるファイニクス

「がんばれファイニクス！」

「ぐ、ぐー！」

なんとか持ちこたえたファイニクス

だが、体力はかなり減っている

「ライチュウとどめの「十万ボルト」！」

「チュー！」

十万ボルトがフィニクスに直撃する

「くー」

弱々しい口えをだすフィニクス

そして、

「フィニクス戦闘不能ライチュウの勝ちー。」

「よくやつたぞ、フィニクス」

ボールにフィニクスを、もじす

「頼んだぞ、エルレイドー！」

「ライチュウ「十万ボルト」ー。」

「エルレイドー「まもる」ー。」

十万ボルトは跳ね返された

「エルレイドー、「サイコカッター」ー。」

サイコカッターをモロにくらったライチュウは倒れた

「ライチュウ戦闘不能！エルレイドーの勝ちー。」

「もどれー！ライチュウ、いけつ、ゴローニャー。」

「エルレイドー、「リーフブーレド」だー。」

「ゴローニャ「じしん」で相手を足止めするんだー。」

身動きの取れないエルレイドー

「ゴローニャ「あなをほる」ー。」

「エルレイドー、感覚で相手の場所を感知しろー。」

エルレイドーは全身の神経に集中してゴローニャの場所をさがしていく

「今だゴローニャー。」

「エルレイドー、「うしろだー！「リーフブーレド」ー。」

リーフブーレドをくらったゴローニャは倒れた

「ゴローニャ戦闘不能！エルレイドーの勝ちー。」

「ゴローニャもどれつ、いけつ、ルカリオーー。」

「エルレイドー、「インファイト」ー。」

「ルカリオー！「はどうだん」だ」

「エルレイドー、「つっこめー。」

エルレイドーの目の前に、はどうだんがきた瞬間

「エルレイド「高速移動」」

エルレイドはルカリオのうしろにまわりこんだ

「今だエルレイド！」「インファイト」だ！！」

ルカリオに直撃する

「ルカリオ戦闘不能！エルレイドの勝ちーよつて、勝者コウキ！」

ワード

観客席からざつと歓声がわく

「強いですね、コウキさん」

「いえ、こがねさんもですよ」

「いい戦いでした。また機会があればバトルしまじょうね」

「もちろんです」

握手を交わすふたり

そのじゅうじゅうは

「やつとポップコーンGATE！」

「さすがですね、コウキさん」

「ありがとうございます、カズキ。次はお前だ、がんばれよー！」

「ありがとうございます」

そしてカズキのときがやつてきた

「じゃあいっきます、コウキさん」

「おお、がんばれよ」

「絶対優勝するー！」

episode 4 — 回戦 (後書き)

とくに書くとあります！

それでは次回をお楽しみに、

episode5 九回戦（前書き）

章に分ける事にしました！

あと第九回戦ですが、あいだの第一～七回戦はストーリーに関係ないでの省略します、

では、お楽しみください

episode 5 九回戦

「それでは、第九回戦を始めます！両者前へ、礼！バトルスタート！」

「いけつ、リーフィス！」

「行くしかないんじやないの～？」ドラグーン…」

第九回戦がはじまったそのとき

「間に合つた～、トイレ混んでるんだもん。あ、ちょうどカズキ君

だよかつた！頑張れ～カズキ君」

カズキ視点

「さつさと終わらせよ～ぜ～、まあすぐ終わるか～」
挑発をする相手

「そうだな、そつちがすぐ終わるな」

「はあ、舐めてんのか？お前なんかなあ 5分でかたづけてやんよお
「ならさつさと始めよ～ぜ～」

「こ～よお

「レグゼ～リーフィス！「冷凍ビーム」！」

「ドラグーン、「ハイドロポンプ」」

ふたつの技がぶつかり合つ

「ドラグーン、「バグノイズ」かましちやつて～！」

「リーフィス、「まもる」」

間一髪のところでもまるリーフィス

(確かにつよいな…けど隙が多いからいける…)

「リーフィス、「冷凍ビーム」！」

「何度もやっても同じ～、「ハイドロポンプ」」

「今だ、「はっぱカッター」！」

はっぱカッターはハイドロポンプにあたり消えてしまつが、水に裂け目ができる、その間に冷凍ビームがはいる

そして、ドライブーンに直撃した

「ドライブーン戦闘不能！リーフィスの勝ち！」

「やあじゃねーか、お前

「俺を舐めんなよ」

「次はこいつだ、いってこい！ドルマイン！」

（ドルマインか…相性は普通か）

「ドルマイン、「シグナルビーム」やつちやつて～」

「リーフィス「冷凍ビーム」！」

相打ちとなり技が焼き消される

「ドルマイン、「十万ボルト」つちやつて～」

「リーフィス「まもる」！」

そして、まもりの壁が消えたとき

「！」のときを待つてたぜ！ドルマイン、「だいばくはつ」！」

（しまつた！）

「リーフィス、ドルマイン共に戦闘不能！」

「だいばくはつでくるとは思わなかつただろ？」

「ああ、まえの十万ボルトはおとりでまもるを釣つたつて訳か

「そのと一り、それでもまもるのあとのインターバルを狙つてドカー

ン！つて訳だよ」

「おれは一枚噛ませたつてことか、だがなあ、おれにも策はある、
いけつ、ファマイン！」

「レツツゴー！ゲンガー！」

「ファマイン！「かえんほづじゅ」！」

「ゲンガー、JUMPしてよけちやつてー」

「ファマイン！「シャドーボール」」

「ゲンガー！「シャドーボール」」

「ファマイン！「十万ボルト」」

「ゲンガー！「サイコキネシス」」

「ほぼ互角のたたかい

「ファーマイン、「シャドーボール」」

「なんどやってもおなじだ！」シャドーボール」

「ファーマイン！「ジオインパクト」！」

シャドーボールをはなったインターバルでジオインパクトをモロに受けるゲンガー

「ゲンガー戦闘不能！ファーマインの勝ち！よつて、勝者！カズキ！」

「強かつたカズキ」

「いえ、お前もだよ！」

こうして第九回戦はおわった

episode 5 九回戦（後書き）

感想、コメントなど待ってまーす

episode 6 決勝戦 -1 (前書き)

やつぱり難しいなあ

変なところあるかもですか？楽しかったでござりー！

「それでは、いまから決勝戦を始めます！両者、礼！バトルスター
ト！」

決勝に進んだ二人の試合は審判の合図で試合がはじまる

「どっちが勝つかなあ、どっちも勝つなんて無理だし、迷うよおー」
観客席から見ているミドリ

そして、ユウキはファイニクスを、カズキはリーフィスを繰り出した。
「二人とも今までの試合で2体しかポケモンだしてないからなあ。
三体目で勝負がきまるわね」

ふたりのバトル展開を予想するミドリ

カズキ、ユウキ視点

「リーフィス、「冷凍ビーム」！」
「かわして、「火炎放射」だ！」
「リーフィス「ハイドロポンプ」！」
「ファイニクス、「エアスラッシュ」？」
「リーフィス！「まもる」だ！」
互角な戦いを見せる二人
(さすが、ユウキさんだ。隙がまつたくない...)
(まもるは厄介だな、どう攻めるか...)
「ファイニクス、「火炎放射」！」
「リーフィス「冷凍ビーム」でかき消すんだ！」

ぶつかり合う二つの技

砂ぼこりが舞う

「今だ、フィニクス！「オーバーヒート」！」

「リーフィスかわせ！」

しかし、不意をうたれたリーフィスは完全によけることはできなかつた

「リーフィス、がんばれ！「はっぱカッター」だ！」

「フィニクス、「火炎放射」で焼き尽くせ」

はっぱカッターは相手の気をひくためのものだつたが、炎で焼かれてしまう

（くそつ、どうしたらいいんだ…）

「今度はこっちから行くぞカズキ！「エアスラッシュ」」

「まもる」だリーフィス

まもるでエアスラッシュを防ぐリーフィス

「今だ、「流星群」！」

まもるのインターバルを狙つたその攻撃は見事にリーフィスに直撃した

そしてリーフィスの目はとうとう回つてしまつた

「リーフィス戦闘不能！フィニクスの勝ち

「よしつ

「戻れつ、リーフィス。よくやつてくれた」

ボールをポケットに入れ、つぎのボールを取り出す

「いけつ、ファマイン！こっちから行きますよ、ユウキさん。「火炎放射」！」

「とつちも「火炎放射」だ」

ぶつかり合う技、しかし、フィニクスの方が押されている
(オーバーヒートと流星群の後遺症か、そのせいで火炎放射の力が弱まつてゐる)

「ファマイン、「シャドーボール」」

「フィニクス「火炎放射」で防げ」

しかし、後遺症で弱まつた力で防げずにシャドーボールはフィニックスへ直撃した

「まだ、フィニックス！上に向かつて」「エアスラッシュ」だ

上にエアスラッシュをはなつたフィニックス、その直後上から乱雑に

おちてくる空気の摩擦

「ファーマイン、「十万ボルト」で防げ！そのまま、「シャドーボール」

落ちてくる空気の摩擦を防いでそつちに気がいつて隙にシャドーボールをあてる

体力もかなり消耗していまフィニックスはシャドーボールが直撃して倒れる

「フィニックス戦闘不能！ファーマインの勝ち！」

お互いの手持ちは2体ずつになつて試合は中盤に入った

episode 6 決勝戦 -1 (後書き)

次回に続きます、

コメント、質問など待っています！

episode 7

決勝戦 - 2 (前書き)

決着がつきます！

決勝戦中盤

お互いの残りポケモンが2体になった

「たのんだぞ！ エルレイド！」

（エルレイドか、相性わるいな…）

「一気に決めるぞファーマイン！ 「シャドーボール」…」

「エルレイド、「サイコカッター」で防げ！」

飛んでくるシャドーボールをサイコカッターで防ぐ

「そのまま「高速移動」だ！」

「ファーマイン「十万ボルト」を乱れ撃ちだ」

乱雑に動く強い電流のせいでもうまく相手に近づけないエルレイド
(考えたな、カズキ。あの手を一か八かでやってみるか)

「エルレイド、突っ込め！」

「ファーマイン、見切るんだ」

「エルレイド、「サイコカッター」を後ろに撃て！」

サイコカッターを後ろに撃つてブーストがわりにする」と動きが
速くなる

（速い…）のままじゃやられる、これしかない

「ファーマイン、相手をひきつける…」

「エルレイド、チャンスだ！ 「インファイト」…」

「今だファーマイン「じばく」…」

「なんだって…!!」

ファーマインのじばくは都市一つを壊滅させるほどの強さがあるとい
われている

それを、ほぼゼロ距離でくらつて耐えるはずがない

「ファーマイン エルレイド共に戦闘不能！」

「よくやつた、ファーマイン」

「休んでくれエルレイド」

「それではお互いポケモンを出してください」

「やつぱり強いな、カズキ！」

「いえ、ユウキさんもですよ。伝説の名がなによりの証拠ですよ、でも負ける気はちつともありません」

「こっちもだ。お互い最後のポケモン、悔いのない戦いにしよう」

「もちろんです」

「いけつ、ディザソル！」

「たのんだぞ！ オルマリア！」

「オルマリアか…ギンノさんに連絡したのか？」

「大会が始まるまえにギンノさんに連絡したんですよ」

（大会前）

「はい、オルマリアにもバトルの楽しさを教えたいんで」

「そう、わかつたわ。けれどぐれぐれも無茶なことはいないでね」

「わかりました」

そしてオルマリアが入ったモンスター・ボールが届く

「ありがとうございます」

「じゃあガンバってね」

通信がきれる

「大丈夫かしら…」

（回想終了）

「じゃあ行きますよ、ユウキさん！」

「ワタシ ガンバル」

「こいつ、カズキ！」

「オルマリア！ 「シグナルビーム」！」

「ディザソル！ 「高速移動」でかわせ！」

「オルマリア！よく見るんだ！」

「今だディザソル！」「つじぎり」

後ろに回り込んだディザソルはつじぎりをくりだす

「かわせ、オルマリア！」

しかし、速さに追いつけず躊躇つてしまつ

「大丈夫か！オルマリア」

「ダイジョウブ…」

「よし、オルマリア」「きあいだま」「

「ディザソル！」「高速移動」でかわせ…」

（あの高速移動を防がないとだめだ…）

「オルマリア、回れ！」

（回る？）

「オルマリア、「シグナルビーム」だ！」

オルマリアを中心に描かれたシグナルビームの円は速い動きのディザソルに当たりそうになる

しかしギリギリのところでディザソルは円の同じ方向に回つてている
ので当たらない

「今だ！ディザソル「あくのまどり」！」

そして、あくのはどうを放つディザソル

回つていたのでよけることなどできぬいオルマリアはくらつてしまつ

そして

「オルマリア、戦闘不能！ディザソルの勝ち！よつて勝者コウキ！」

「！」

ワーウー　ヒューヒュー

歓声がビリとわく

いいバトルだつたぞー
かつこいー

「どうもよく頑張った！」

いろんな声が聞こえてくる

「よくやつたぞ、オルマリア」

「ゴメン ネ…」

「いいんだ、ゆっくり休んでくれ」

オルマリアをボールに戻す

「おめでとうござります、ユウキさん」

「ありがとうございます、カズキ。なかなかいい戦いだった」

「ええ、またバトルしましょうね」

「もちろんだ」

（表彰式）

「ユウキ殿、今大会での優勝おめでとう。優勝カップトロフィーと

高級ポケモンフーズ一年分を贈与します」

「ありがとうございます」

ワード

おめでとー

また歓声がわく

「それでは、ひきつづき船の旅をお楽しみください」

そして、バトル大会は幕をとじた

episode 7 決勝戦 - 2 (後書き)

次回からストーリーが進みます！

じつゝ期待を！

episode 恋の予感（前書き）

あけましておめでとうございます。(< >)。

執筆し始めて一ヶ月もないですが今年もよろしくお願いします！

それではepisodeをお楽しみください。

episode 8 恋の予感

「大会後、レストランへ

「あ～、俺の一勝一敗かあ～」

「まあそんなに落ち込むなよ」

「ユウキさん強いですね！今日初めてみましたけど」「かつたです！」

「そうかな？まあカズキも強かつたけどな。今度はミドリともバトルしたいかな」

「そ、そんな私なんかそんな強くないですよ～」

「はは、冗談だよ。おつともうこんな時間か…」
時計をみると11：30を指していた

「じゃあ俺は部屋に戻るな」

「あつおやすみなさいユウキさん」

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみカズキ、ミドリ」

そしてユウキと別れた二人も部屋へ向かう

「ユウキさんかっこいいなあ～」

「そうだな、あのひとは……っつ～！」

腹を抱えてその場にうずくまるカズキ

「どうしたの！？カズキくん！～大丈夫！～ねえ！カズキくん！～！」

意識が遠くなつていくカズキ

「医務室へ

「ん、んん…」

ゆっくりと田を開けるカズキ

「田がさめましたか？」

白衣を着たおじさんがはなしかけてくる

「えつと…」
「」

おじさんに問い合わせるカズキ

「医務室ですよ、そこのお嬢ちゃんが汗かいて運んできてくれたんだよ」

自分の寝ているベッドの体のほうを見るヒドリが寝息をたてて寝ていた

「そういう君の事が大切だつたんだね」

そういうと、医者はカズキが重度の胃もたれでありすぐ点滴をうつて一日寝れば治ることを告げて個室をあとにした

部屋にある時計を見るカズキ

（1時か…結構寝てたんだな…）

ふとヒドリを見る

（普通に寝てるとかわいいのにな… それにしても、俺のために頑張ってくれるなんてな）

手をヒドリの頭にあてるカズキ

「ありがとな、ヒドリ」

そのときカズキは心の奥で何かが動いたのだが、カズキはまだその正体に、気づかないのであった

（夜中3時）

ヒドリは田を覚ました

「寝ちゃつたな、にしてもカズキくんの寝顔かわいいな
ほっぺたをツンツンするヒドリ

「んんー」

夢でも見てるのかヒドリの指をつかむカズキ

「ち、ちよつとカズキくん！」

腕に抱きつくカズキ

（別に嫌じやないかも／／／）

顔を紅くするミドリ

（やつぱり私、カズキくんの事が好きなのかな。いつか伝えなきや
ね！）

そしてそのまま眠りについたミドリであった

episode 恋の予感（後書き）

小説の序盤にフラグをたてておいたほうが楽なのでそれしました

e ま さ う な う じ ま た て ま ま (ま ま)

e ま さ う な う じ ま た て ま ま (ま ま)

朝 6:00

目を覚ますカズキ

「まだ6時か…………！」

隣には寝ている//ドリがいた、そこまではいいのだが
ミドリの腕で寝ている状態であった

(「殺される…）

「お、おーい…//ドリやーん…」

ミドリが寝てるか確かめる

・・・・・・・・・・

(ね、ねてる、よかつた…)

身体をおこすカズキ

「あー、よく寝た！」

急に大声をあげておあわ//ドリ

「！…！…、お、おきてた？」

汗が頬をつた

「当たり前でしょー重かつたんだからねーほり、腕痺れてるー」
腕を見せる//ドリ

「す、すこませんでしたー」

その場で土下座をするカズキ

「ち、ちゅうと、なにしてるのー？」

「な、なんでもするから、ゆ、ゆるしてー」

全力で謝罪するカズキ

「ち、ちゅうと、べ、別にいこ…」

黙りだす//ドリ

「あ、あのー、み、//ドリやん？」

(やばい、死んだな…)

「カズキくん！」

「は、はい！」

カズキはミドリの顔をみた

ミドリは不適な笑みをしている

「なんでもするつて言つたよね？」

「い、言つたけど…」

「なら今日ジョウトについたらいつぱに奢つてもらうからねー。ち、ちょっとまつてくれよ、俺にもサイフの事情が…」

「文句でも？」

「な、ないです」

負けたカズキ

「やつたあ！ いっぱい買つてもらうからね！」

「はあ、」

落ち込むカズキだが、子供のよつたな笑顔を見せせるミドリを見て（まあ、いつか）

と思つのだった

「ほら、ジョウトにつくの8時だから早く部屋に戻らねーと、『そうだね！ 昨日いろいろあつてお風呂入れてないからシャワー浴びないと…』

「俺もそうするかな」

医務室をあとにした二人は部屋に戻る道を歩いていた

「あつそうだ、ミドリ」

立ち止まりミドリのほうに向くカズキ

「どうしたの？」

首をかしげるミドリ

「俺が倒れたとき医務室に運んでくれてありがとう」

ミドリに頭を下げるカズキ

「そ、そんなあらためて言わなくていいよ。当然のことをしていただけなんだから」

照れるミドリ

そして、部屋に着く

「じゃあまた後でな」

「うん！」

それぞれの部屋に入る二人

「ミドリ～

「カズキくんに感謝されるなんてなあ
シャワーを浴びるために服を脱いでいく

「うわつもう7時前だ！急がなきや！」

バスルームに向かうミドリ

「早く気持ち伝えないとダメだよなあ」

カズキが頭に浮かぶ

ミドリは顔を紅くする

「なに、考えてんのよ！」

だがミドリの頭から消えないカズキ

「カズキくんは私のことどう思ってるのかな…」

今までのカズキとのやりとりがフラッシュバックする

「決めた！私今日告白する！」

決意を固めたミドリだった

「カズキ～

「そろそろジョウトか～」

カズキも服を脱ぐ

「ミドリには言う理由がなかったから言つてないけど、あいつと会えるかな…」

カズキのジョウトへの目的はリーグ優勝とシロガネ山のトレーナーと戦うことだけではなかった

昔ジョウトに住んでいたころの友達と会うことでもあった

「あいつ俺の」と覚えてるかな…」

（8時前）

ミドリとカズキは合流してエントランスのソファーに座っていた
「カズキくん、そういうえばコウキさんは？」
「ああ、コウキさんならジョウトについたら合流するよ」
「そりなんだ、ジョウトでいつぱい奢つてもらひつかね…」
「はいはい、わかったよ」

ピンポン

ジョウト アサギに到着いたしました お客様はお忘れものなくお
降りください

「さて、降りるか」

「やうだね」

（あつ、そうだ！）

突然カズキの手を握るミドリ

「おつ、おいつ／＼／＼

「はぐれたらダメだからね！」

「わ、わかった」

（やつたあ！大成功！）

ぎゅっと手を握るミドリ

（な、なんか緊張する…）

動搖するカズキ

そして、船の外にでた二人

（やつと解放される！）

手をはなすミドリ

「へー、ここがタンバかあ」

「ミドリ、コウキさんがいるから行くぞ！」

「待つてー、カズキくん」

「よつ、二人とも。相変わらず仲いいなあ」

「ですか？」

「そうだよ」

肯定するコウキ

「俺もそう思うなー」

突然うしろから声が聞こえる

（この声っ？）

「久しぶり、カズキ」

振り返るカズキ

「お前は…………ヒビキ！」

episode 9 ジョウフル上陸（後編）

とうあえず第一章は完結です

次からは第一章です！

コメントなど待っています！

episode10 ルナの始まり(前書き)

書かせてもらひましたが、この小説はポケスペな感じで書いて、ゲームだけをとつた話です

ではepisode10をお楽しみあれー！

episode 10 ヒビキの始まり

シロガネ山 頂上

「はあ……はあ……つ、強い……」

少年、ヒビキは息を切らしていた

「…………カメックス……「ハイドロポンプ」」

「バクフーン！「火炎放射」だ！」

二つの技がぶつかり合い、砂ぼこりがまつ
(くつ、よく見えない)

砂ぼこりがなくなるとそこにはバクフーンが倒れていた

「バクフーン！」

バクフーンのもとに走るヒビキ

「よくやつてくれた、ボールに戻つてくれ」

ボールにバクフーンを戻す

「お前なにもんなんだ？」

たずねるヒビキ

「俺の名は……」

一週間後

ピローン

「ん？メールか？」

ウツギ博士はパソコンのメールを開く

「何だつて！？」

ウツギはヒビキのポケナビに電話をかける

「はい、ヒビキですか？」

「ヒビキ君ーウツギだ！ いきなりだが、すぐに研究所にコトネくんと一緒に来てくれー！」

「ど、どうしたんですか？ って… もう切れてる… しかたないコトネに連絡するか？」

ポケナビでコトネに電話をある

「もしもし、コトネか？」

「そうだよ、どうしたのヒビキくん？」

「ウツギ博士がなんか急ぎの用で研究所に来てくれつよ」

「わかったーじゃーね」

「ふう、俺も行くか…」

後ろの大きな山を見て歩き出すヒビキ

ここはシロガネ山ふもと

普通は制限区域なのだが強いと認められた者だけが入るのを許される区域だ

立ち去り際に山に向かってつぶやく

いつかあなたに勝つてみますよ…

……ハサミと…

～ウツギ研究所～

「思っていたよりはやかつたね、ヒビキくん」

「博士焦つてた様子だったしさー」

「あれ、コトネくんはどうしたんだい？」

「えーと、俺とコトネは別行動なんですよ、一応連絡しどいたんでもぐるとおもいますよ」

「そうだったんだね」

納得するウツギ

「で、なにがあつたんですか？」

ウツギにたずねるヒビキ

「それがね…」とトネくんが来た見たいだよ

「こんにちわー」

「よろしくてくれたね、早速だけど一人ともこのメールを見てくれ」
パソコンの画面を覗く一人

ウツギ博士

久しぶりです、ウツギ博士

いきなりですが、半年前にターナーがトーホク地方で世界征服を企
んでいたのを知っていますね

そして行方をくらましていたターナーの情報が手に入りました
今回ターナーはジョウトを狙っています

なのでそちらの信用の高いトレーナーと協力してほしいです
それに今回は他の組織との関連もあるかもしれないでこちらから
も何人か助つ人を送りたいと思います

3日後の午前9時にアサギの港に着くので落ち合にお願いします

ヒイラギ

「というわけだよ」

「なるほど、だから俺たちを呼んだんつスね」

「そのとおり、引き受けてくれるかな?」

「もちろんです、このバカは私がちゃんと見ておくので安心して下
さい」

「おいつバカとはなんだよ」

「それでは行つてきます、ウツギ博士」

「無視かよ……」

「ちょっと待つてくれ、一人とも、図鑑を貸してくれるかい」

「あ、はい」

図鑑をウツギに渡す一人

博士はパソコンに繋いで熟練のキーボード打ちをしている

「よし、これでOKだ」

図鑑を一人に返すウツギ

「なにしたんだ??」

首を傾げるビビキ

「4年前にホウエンに隕石が落ちたのは知ってるだろう?」

「あつたりまえじゃん!あの時は凄いニュースに流れてたからな」

「それでその隕石の影響で数年前から新種のポケモンが出てきているんだ、この際だからそのポケモンに対応した図鑑にグレードアップしていたんだよ」

「なるほど、ということは助つ人の人たちは新種のポケモンを持っているんだな、なんかワクワクしてきた!」

「はは、ビビキくんらしいなあ……では、一人とも頼みましたよ!」

『はいっ!』

こうしてビビキの螺旋は周りはじめた…

episode10 ハルキの始まり（後書き）

前回タンバとかいてましたが正しくはアサギです

改稿しておきます、申し訳ありません

またこの作品が終わったらポケスペの執筆わしたいと思いますので
どうかお願い致します

episode 1-1 理由（前書き）

episode 1-1 お楽しみ下さい

～ウツギ研究所前～

「あと3日あるわ、どうする?」

「トネにたずねるヒビキ

「やうをとぶじや 今日中に着こちやうわね」

答える「トネ

「まあ どうあえ俺ん家寄つてくか?」

「そこで考えよひせ、と付け足すヒビキ

「えつと、別にいいけどお母さんは?」

「さつきちよつと覗いたらいなかつたから大丈夫だろつよ

「変なことしないわよね?」

「するかよ!……!」

「冗談よ、じや あちよつとお邪魔するね

「はあ、こいつといると疲れる……」

ため息をつくヒビキ

「なんかいった?」

作り笑いの「トネ

「なんでもないです」

～ヒビキ家～

「久しぶりに入るなーこの家」

「俺がチャンピオンになつたとき以来だつけ?」

ヒビキがチャンピオンになつたときパーティーがこの家で開かれた

それに「トネも招待された

「あの時は楽しかったわ」

「そうだったな」

キッチンからホールドーを一人分持つて帰るビビキ

「ほれ

ホールドーを渡すビビキ

「ありがと」

受け取るホールドー

「ふう、こんなことがあったな。ロケット団と戦ったし、あの時はダークもロケット団を潰そうとしてたしな」

「そんなこともあつたんだね」

沈黙が流れる

「また、戦いが始まるのか……」

「いや」

突然つぶやくホールドー

「え? ?」

「本当はいやだつたわー」

「び、びついたんだよ」

「ビビキくんはなんとも思わないのー? 死んじゃうかもしれないの

「ーーー」

「…………」

黙るビビキ

「ビビキくんは怖くないのー?」

目に薄つすらと涙をみせる

「そりや怖いわ、でも俺たけがやうなきやむつとたぐるの命を失うかもしれない」

「でも、私たちがやらなくてもー」

「ウツギ博士は恩人だし、手紙に書いてあった”ヒイラギ”っていう名前… その人の子供は俺の友達なんだ、義理っていうのがあるから俺は動いてるんだとおもう」

「…………」

「だから俺は戦うぜ」

「トネに向かつて言葉を放つ

「………… そうよね、私間違えてた。自分のことばっかり考えてたわ、ヒキくんの話きいてそれに気づいたわ」

「トネ…」

「私も戦う！！私だってつよいんだから」

「ありがとう、トネ！」

一人の距離は縮まつただろう

episode 1-1 理由（後書き）

イッシュはできません

ダークっていうのはウツギ研究所のポケモン盗んだ奴ですよー

コメントまつてまーす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3460z/>

ポケットモンスター レグルス

2012年1月10日21時46分発行